HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	『源氏物語』における歌ことば表現「荻」
著者	井野，葉子；INO，Yoko
引用	北海学園大学人文論集(59)：116(六三)-99(八0)
発行日	2015-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

『源氏物語』における歌ことば表現「荻」

井野葉子

はじめに

『源氏物語』の文章には様々な歌ことば表現（和歌、引歌、歌語などの和歌的な表現）があり、その諸相の一端を明らかにするのが本稿の目的である。具体的には、歌ことば表現としての「荻（をぎ）」を取り上げる。

荻という植物は、低層湿原に生え、高さ一メートルから二、五メートルにも達する大形のイネ科の多年草である。葦と同じような水辺に生え、両者の形も似ているが、秋に付ける花穂の形はススキに近い植物である。

『源氏物語』における「荻」の用例は一四例ある。そのうち、和歌の中の言葉として使われているものが七例、散文の中で使われているものが七例ある。その散文の中の七例のうち、和歌的な発想に裏付けられた表現となっているものは五例もあり、和歌的発想とは直接関係のない例は二例しかない。全一四例のうち、和歌あるいは和歌的発想に裏付けられた表現が一二例もあるということは、「荻」という言葉は、和歌的な発想を離れては存在しづらいほど、和歌の世界に深く根ざした歌ことばであると言えよう。

そこで本稿は、まず、『源氏物語』が成立した平安中期までの和歌における「荻」の用例を調査して、和歌における「荻」の連想の体系を明らかにし、その上で『源氏物語』における「荻」の全用例を検討して、『源氏物語』

における歌ことば表現としての「荻」の役割を明らかにしたい。

一　平安中期までの和歌における「荻」

まずは、平安中期までの和歌における「荻」の用例を調査して、歌ことばとしての「荻」の諸相を探りたい。

上代の『万葉集』における用例は次の三例である。

甚檀越、伊勢国に行きし時に、留まれる妻が作る歌一首

Ⓐ神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に

（『万葉集』巻四・五〇〇、『古今六帖』二四〇七では初句「神風や」、第三句「折れ伏して」）

Ⓑ葦辺なる荻の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る

（『万葉集』巻十・二一三四、『古今六帖』四三五八では第二句「荻の葉そよぎ」）

Ⓒ妹なろが使ふ川津のささら荻あしと人言語りよらしも

（『万葉集』巻十四・三四四六）

Ⓐは、甚檀越が伊勢の国へ行った時に留守をしている妻が詠んだ歌で、「今頃、夫は伊勢の浜に生える荻を折り伏せて旅寝をしているのだろうか。荒涼とした浜辺で」という意味である。

Ⓑは、「葦辺にある荻の葉がさやさやとそよいで秋風が吹いてくるとともに、雁が鳴き渡っている」という意味である。「荻の葉さやぎ」とあるように、風に吹かれて立てる荻の葉の音が、雁の鳴き声とともに取り上げられている。

Ⓒは、「あし」に「葦」と「悪し」を掛け、「愛しいあの娘が使う川津の小さな荻を、葦でないのに悪しと言う人がいるけれど（彼女のことを悪く言う人がいるけれど）、僕は気にしない」という意味である。荻は、その形状が葦と似ている上、同じような湿地に生えていることから、葦と間違えられやすい。ここでは、「荻＝彼女」が「葦＝悪し」と誤解されていると詠んでいる。

『万葉集』に詠まれた「荻」の特徴としては、Ⓐの「浜」やⒸの「川津」のように、海辺や川辺に生える植物であ

ること、Ⓑのように、秋風に吹かれて葉音を立てること、Ⓑの「葦辺なる荻」のように、葦と同じ場所に生えるので、Ⓒのように、葦と見間違えられやすいことなどが挙げられる。

次に、平安前期から中期までの和歌における「荻」の用例を見る。いつの頃からか、荻は川辺や海辺から貴族の邸の庭に移し植えられるようになる。例えば、天禄三（九七二）年の女四宮歌合の冒頭の「斎宮に男女房分きて、御前の庭の面（おも）に、すすき、荻、らに、しほに、くさのかう、をみなへし、かるかや、なでしこ、萩など植ゑさせたまひ……」という詞書や、『和泉式部集』の「掘り植ゑしかひもあるかな我が宿の荻葉の風ぞ秋も知らする」（一四一）のように、水辺から掘ってきた荻を貴族の邸の庭に植えるようになったため、めったに外出しない貴族女性が邸に居ながらにして観賞できる植物となっていく。

まずは、三代集における「荻」の歌を見ていく。平安前期においては「荻」は歌材として確立されていなかったのか、『古今集』に「荻」の歌は一例もない。平安中期になってようやく『後撰集』に四例、『拾遺集』に三例、見出すことができる。

Ⓓ今日（けふ）よりは荻の焼（や）け原かき分けて若菜摘みにと誰をさそはん

（『後撰集』春上・三・兼盛王、『大和物語』八六段）

思ふこと侍りける頃

Ⓔいとどしく物思ふ宿の荻の葉に秋と告げつる風のわびしさ

（『後撰集』秋上・二二〇、『古今六帖』三七二一）

秋、大輔が太秦（うづまさ）のかたはらなる家に侍りけるに、荻の葉に文を挿（さ）して遣はしける　左大臣

Ⓕ山里の物さびしさは荻の葉のなびくごとにぞ思ひやらるる

（『後撰集』秋上・二六六）

平かねきがやうやう離（か）れがたになりにければ、遣はしける　中務

Ⓖ秋風の吹くにつけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし

（『後撰集』恋四・八四六、『古今六帖』三七一八、『和漢朗詠集』四〇一、『中務集』二三〇では第二句「吹くをりにしも」）

（六五）

延喜御時御屏風に　貫之

Ⓗ荻の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるるはじめなりけれ

（『拾遺集』秋・一三九、『拾遺抄』八八、『新撰和歌』八、『古今六帖』三七一六、『貫之集』一〇〇）

八月ばかりに雁の声待つ歌詠み侍りけるに　恵慶法師

Ⓘ荻の葉もややうちそよぐほどなるをなど雁がねの音なかるらん

（『拾遺集』秋・一六二、『拾遺抄』一〇八、『恵慶法師集』七九では第四句「などか雁がね」）

人に物言ふと聞きてとはざりける男のもとに　中宮内侍

Ⓙ春日野の荻の焼け原あさるとも見えぬなき名をおほすなるかな

（『拾遺集』雑春・一〇二〇、『拾遺抄』三八二）

Ⓓは、「立春になった今日からは、荻の焼け原（春になって新芽の成長をよくするために枯れた荻を焼いた原）をかき分けて若菜を摘みに誰を誘いましょうか、あなたを誘いたいです」という意味である。春の風物として荻の焼け原の若菜摘みが詠まれている。

Ⓔは、「秋」に「飽き」を掛け、「ますます恋の物思いに苦しんでいる私の家の庭の荻の葉に音を立てさせて、秋の訪れとともにあの人が私に飽きたと知らせる風のわびしいこと」という意味である。秋風に吹かれて立てる庭の荻の葉擦れの音が、邸内にいる人に秋の到来を知らせ、恋人の「飽き」をも知らせる音となっている。

Ⓕは、左大臣藤原実頼が太秦寺の傍の家にいる大輔に贈った歌で、「あなたのいる山里の物寂しさは、荻の葉が秋風になびくごとに自然と思いやられますよ」という意味である。荻の葉のなびく様が寂しい秋の到来を感じさせる景物となっている。

Ⓖは、次第に心が離れていく恋人の平かねきに対して中務が贈った歌で、「秋」に「飽き」を掛け、「あなたが私に飽きて秋風が吹くにつけてもお手紙もくれないのですねえ。私が荻の葉であれば、秋風が訪れてくれたら（あなたがお手紙をくれたら）音を立てますのに（お返事をすぐ出しますのに）」の意味であろうか。[注1] 風が荻の葉に吹

（六六）

いて荻の葉が音を立てることが、男が女に音信（手紙あるいは訪問）をして女が応じることの喩えとなっている。

Ⓗは、延喜一八（九一八）年、醍醐天皇皇女勤子内親王裳着屏風歌の歌で、「荻の葉のそよぐ音こそが秋風が人に気付かれる最初なのだなあ」という意味である。秋風の到来を荻の葉擦れの音で感じるという趣向である。

Ⓘは、「荻の葉もだんだんそよぐ音を立てる頃になったのになぜ雁の鳴く声がしないのだろうか」という意味である。『万葉集』のⒷ以来、荻の葉擦れの音と雁の鳴く声とが秋の風物として一つの取り合わせになっている。

Ⓙは、他の男と関係しているというあらぬ噂を聞いて来なくなった男に対して中宮内侍が贈った歌。「な」に「菜」と「無」を掛け、「春日野の荻の焼け原で探し求めても見つけられない菜ではないけれど、無き名という菜を私に負わせているのですね（あらぬ噂のせいであなたは来てくれないのですね）」という意味である。Ⓓと同様、春の風物として、荻の焼け原に若菜を摘みに行く風習を歌材にしている。

次に私撰集である『古今六帖』を見てみよう。先に挙げた『万葉集』のⒶが「旅」の題のもとに、Ⓑが「雁」の題のもとに収められているほかは、「荻」の題のもとに八首の歌がある。八首のうち三首は先に挙げたⒺⒼⒽなので、それを除いた五首を次に挙げる。

Ⓚいつも聞く風とは聞けど荻の葉のそよぐ音にぞ秋は来ける
（『古今六帖』六・三七一五・貫之、『貫之集』三八五では第二句「風をば聞けど」）

Ⓛ荻の葉に吹き来る風ぞ秋来ぬと人に知らるるしるしなりけれ
（『古今六帖』六・三七一七・躬恒、『躬恒集』四四八では初句から第二句「荻の葉の吹き出づる風に」、第五句「しるべなりける」）

Ⓜ朝夕に撫でておほしし草なればおひて見ゆるぞ我が宿の荻
（『古今六帖』六・三七一九）

Ⓝことわりやうらむることも秋風のそよそよ荻の葉にぞおどろく
（『古今六帖』六・三七二〇）

Ⓞ秋風の荻の葉を吹く音聞けばいよいよ我も物をこそ思へ
（『古今六帖』六・三七二二）

（六七）

Ⓚは「いつも聞く風の音とは聞くが荻の葉のそよぐ音によって秋がやってきた実感がわくなあ」、Ⓛは「荻の葉に吹き来る風が、秋が来たと人に知られるしるしなのだったなあ」という意味で、いずれも荻の葉音によって秋の到来を知るという趣向になっている。Ⓜは「朝夕に撫でて育てた草だから生えて見えるのが我が家の荻だよ」の意味。Ⓝは、風にそよぐ荻の葉擦れの音の「そよそよ」に「其よ其よ」(相づちの「そうよそうよ」という意味)が掛けられ、「もっともだなあ、私があの人を恨むのも。秋風が荻の葉に吹いて「そうよそうよ」と相づちを打ちながら「そよそよ」と立てる音にはっと気付かされるよ、あの人が私に飽きて来なくなり、もう季節は秋になってしまったことを」の意味であろうか。(注2)Ⓞは、「秋」に「飽き」を掛け、「秋風が荻の葉に吹く音を聞くと、恋人が私に飽きたことが実感されて、ますます私も物思いをすることだよ」という意味である。

次に、『和漢朗詠集』を挙げておきたい。『和漢朗詠集』に「荻」の歌は二首あり、一首は先に挙げたⒼの歌、そしてもう一首は藤原義孝の歌である。

(六八)

Ⓟ秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露

(『和漢朗詠集』巻上・秋・秋興・二二九・義孝少将、『義孝集』四)

Ⓟは「秋の風情はやはり夕暮れ時がひときわ身にしみる。荻の上を吹く風の音、萩の下葉に置く露」という意味で、聴覚を研ぎ澄ました「荻の上風」と視覚を凝らした「萩の下露」の対句表現が見事であり、『栄花物語』や『平家物語』などの後世の文学にしばしば引用されている。

以上、平安中期までの和歌における「荻」の特徴をまとめると以下のようになる。ⒹやⒾのように荻の焼け原の若菜摘みが春の風物として歌材になることもあるが、大方は秋の景物である。Ⓜのように庭の植物として見られる対象となることもあり、Ⓕのように荻の葉のなびく様子が秋の景物となる。しかし、最もよく詠まれるのは、ⒾやⓅのような荻の葉擦れの音である。特に、ⒽⒿⒾのように、秋風が吹いて立てる荻の葉擦れの音が秋の到来を告げる音となる。人事に及ぶと、ⒺⒼⓃⓄのように、「飽き」が掛けられた「秋」の風が荻の葉に吹いて、恋人

に飽きられたことを人に気付かせる景物となる。また、荻の葉擦れの音が、相手の音連れ（手紙や訪問）の喩えとなり、Ⓖのように、「荻の葉に吹き寄せる風＝女に音信（手紙や訪問）をする男」という比喩表現を形成する。じっと自邸にいて男の手紙や訪問を待ちわびている女にしてみると、秋風に吹かれて立てる荻の葉擦れの音が「音擦れ」であるがゆえに「音連れ」（手紙や訪問）を連想させ、男に飽きられて男の「音連れ」がとんとなくなったことを痛感させるというわけである。

以上、平安中期までの和歌における「荻」の連想の体系について述べた。これらを踏まえた上で、次節では『源氏物語』における「荻」の用例を検討したい。

二　『源氏物語』における「荻」の用例

『源氏物語』における「荻」の用例は一四例ある。その全てを以下、物語の展開の順に挙げて検討していく。

物語に初めて「荻」が登場するのは、伊予介の娘、軒端荻をめぐる場面である。三例の「荻」がこの場面に集中している。

①　ほのかにも軒端（のきば）の荻を結ばずはつゆのかごとを何にかけまし

②高やかなる荻につけて、……御返り、口ときばかりをかごとにて取らす。

③　ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜に結ぼほれつつ　（夕顔巻一九一頁）

①は、かつて一度だけ契りを交わした軒端荻に対して源氏が贈った歌である。「荻を結ぶ」に男女関係を結ぶ意味を込めて、「ほのかにも軒端の荻を結ばなかったならば（僕とあなたが契りを結ばなかったならば）、いささかの恨み言を何にかこつけて訴えることができたでしょう」という意味で、「契りを結んだので恨み言を訴えます」と歌っている。「つゆ」は「いささか」の意味の「つゆ」と荻の葉に置く「露」との掛詞である。この手紙を②のように「高やかなる荻」に付けたのは、軒端荻の身長が高いことをからかったものである。荻は、丈が大きいものは二、五メートルほどある植物なので、源氏が冗談半分に背の高い女性を喩えるのもうなずける。③はそれに対

（六九）

する軒端荻の返歌で、「契りを交わしたことをほのめかすお便りにつけても、荻の下葉の半ばは霜にあたってしおれているように、少将と結婚した私も、半分は新婚の喜びに浸りながら、半分はあなたゆえに悩んでしおれています」という意味である。この贈答場面によって伊予介の娘は軒端荻と呼ばれるようになる。この①～③の「荻」の三例は、和歌の中の言葉として使われたり、和歌の書かれた手紙を結び付ける植物として登場したりしているので、和歌的な発想に基づいた歌ことば表現である。「荻を結ぶ＝男女の契りを結ぶ」という比喩表現と、丈の高さに身長の高さの意味を込めるところが、通常の平安和歌には見られない、『源氏物語』独特の趣向である。

④荻の葉も、さりぬべき風の便りある時は、おどろかしたまふをりもあるべし。　（末摘花巻二六六頁）

④も、軒端荻をめぐる語りの一節で、「荻の葉」は軒端荻のことである。「軒端荻に対しても、源氏はしかるべき音信の機会がある時には手紙を出して、軒端荻をはっとさせることもあるのだろう」と語り手が推測している。風が荻の葉に吹いて音を立てて人を驚かせることが、男

（七〇）

が手紙を出して女をはっとさせることの比喩となるという、和歌的な発想による表現である。

⑤野にとまりぬる君達、小鳥しるしばかりひきつけさせたる荻の枝など苞（つと）にして参れり。

（松風巻四一八頁）

⑤は、源氏が桂の院で宴を催す時、野で鷹狩をして旅寝をしていた若殿たちが、獲物の小鳥をほんの形ばかり結び付けさせた荻の枝などを土産にして参上したことを語る地の文である。桂の川辺に生える荻に小鳥を結び付ける趣向が、京の郊外の野趣あふれる一興となっている。この例は、歌ことば表現ではない。

⑥……時雨うちして荻の上風（うはかぜ）もただならぬ夕暮に、

（少女巻三四頁）

⑥は、語りの地の文で、内大臣が大宮のもとに参上する時の自然描写である。「荻の上風もただならぬ夕暮」という表現は、第一節で挙げたⓅの藤原義孝の歌「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」を踏まえた引歌表現である。秋のひときわ身にしみる夕暮の、荻の上を吹く風の音の趣を詠む義孝の歌の世界を引きなが

ら、さっと降る時雨を加えて、さらにしみじみとした風情を添えている。

⑦　さ夜中に友呼びわたる雁がねにうたて吹き添ふ荻の上風（うはかぜ）
　身にもしみけるかなと思ひつづけて、
（少女巻四九頁）

⑦は、雲居雁との仲を引き裂かれて嘆く夕霧の歌で、「真夜中に友を呼び続ける雁の鳴き声に、不快に吹き加わる荻の上を吹く風よ」という意味である。雁の鳴き声と荻の葉擦れの音は、第一節で挙げたⒷや①のように『万葉集』以来の伝統的な取り合わせである。ここでは、雁に喩えられて友を呼び求めて泣く雲居雁に対して、夕霧との仲を引き裂きさこうとする父内大臣の圧力が、荻に吹いて大きな音を立てる風に喩えられている。荻を吹く風が恋仲を引き裂く圧力の喩えとして詠まれるのは、管見によれば平安中期までの和歌には見られないことなので、『源氏物語』独特の表現であると言えよう。

また、この夕霧の歌の第五句「荻の上風」は、第一節で挙げたⓅの藤原義孝の歌を踏まえていると思われる。[注3]

夕霧は、義孝の歌の「夕まぐれ」を「さ夜中」に転じ、「荻の上風」の音を聞いて「ただならぬ」思いを感じ、その音に対して「うたて」と不快感までも抱いている。義孝の歌を引きながら転じ、新しい要素を付け加えているのではないだろうか。荻の上風の音が内大臣の圧力の象徴であるならば、振り返って⑥の「荻の上風」という表現も、単なるしみじみとした秋の風情ではなく、これから吹き荒れる内大臣の圧力の前兆とも読めるかもしれない。少女巻の⑥と⑦は共に義孝の歌を引いて連動しつつ、『源氏物語』独自の表現を切り拓いているのではないだろうか。

⑧秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子（せこ）が衣（ころも）もうらさびしき心地したまふに、……五六日（いつかむゆか）の夕月夜（ゆふづくよ）はとく入りて、すこし雲隠るるけしき、荻の音もやうやうあはれなるほどになりにけり。
（篝火巻二五六頁）

⑧は、秋の夕べに源氏が夏の町の玉鬘のもとを訪れる場面である。秋風に荻の葉擦れの音が身にしみる季節になったという自然描写は、和歌の発想に裏付けられた歌

（七一）

ことば表現である。

⑨　おほかたに荻の葉過ぐる風の音もうき身ひとつにしむ心地して　（野分巻二七七頁）

⑨は、明石の君の独詠歌である。野分見舞いに来てくれた源氏がちょっと座っただけでそっけなく立ち去ってしまったことを悲しんでいる歌である。「普通に荻の葉を通り過ぎる風の音も、見舞いに来てくれた源氏がそっけなく帰ってしまうような、辛い我が身一つにはしみる気持ちがして」という意味である。荻の葉に吹いて通り過ぎる風は、明石の君のもとへ来たもののすぐ帰ってしまう源氏の喩えである。「荻の葉」を女、そこへ吹き寄せる「風」を男と見立てる和歌の常套的な表現である。

⑩見るかひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる荻を高やかにかざして、ただ一かへり舞ひて入りぬるは、いとおもしろく飽かずぞありける。　（若菜下巻一七二頁）

⑩は、源氏の住吉参詣の折、住吉の社頭において、とても白く枯れた荻を高々と挿頭にさしている舞人たちの姿を語る地の文である。住吉の地で海辺に生える荻を挿頭にするのは、その土地の植物を愛でる一興となろう。これは、和歌的表現というわけではない。

以上、『源氏物語』における「荻」の全一四例のうち一〇例を、物語の展開の順に見てきた。残りの四例については、次節で論じたい。

三　夕霧巻以降
――「露」「荻原」「芹川の大将」――

さて、『源氏物語』中の「荻」の用例を見ていくなかで、夕霧巻以降の用例について節を改めたのは、夕霧巻の⑪、蜻蛉巻の⑫、手習巻の⑬の和歌が、葉擦れの「音」ではなく、葉に置く「露」を取り上げて詠んでいる点に特徴があると思われるからである。なぜなら、荻は、葉擦れの音が詠まれることが圧倒的に多く、葉に置く露が詠まれることが少ないからである。ちなみに第一節で挙げたⒶからⓅまでの一六例の和歌において、露が詠まれた例は一例もない。第二節までに見てきた『源氏物語』の「荻」の用例においても、露が取り上げられた例は①の源氏の

歌だけである。また、⑪と⑬に「荻原」という特殊な言葉が使われていること、⑫に散逸物語「芹川の大将」が深く関わっていること、「荻」という言葉を通して蜻蛉巻と手習巻とが同時期の物語として連繋することなど、夕霧巻以降の「荻」の用例は、それまでの用例とは趣を異にしていると思われるからである。

では、夕霧巻以降の物語における「荻」の用例を見てみよう。

⑪　荻原（をぎはら）や軒端（のきば）の露にそぼちつつ八重たつ霧を分けぞゆくべき　（夕霧巻四一一～四一二頁）

⑪は、小野の山荘で落葉の宮に接近した夕霧が、朝出ていく時に落葉の宮に詠みかけた歌である。「荻原よ。僕は、軒端の荻の露にしとどに濡れながら、幾重にも立ち込める霧の中をかき分けて帰って行かなければならないのでしょうか」という意味である。荻の葉に置く露と立ち込める霧は夕霧の涙の象徴である。あるいは、侵入された落葉の宮も泣いているので、落葉の宮の涙の象徴でもあるかもしれない。この荻は、貴族の邸の庭に人工的に植えられているものではなく、小野の山里に自生している荻である。物語の舞台が平安京内ではなく、比叡山麓の小野の山里に移ったことにより、山里の風景としての荻が描かれているのである。「荻原」と「原」が付くことによって、それが群生であることがわかる。おそらくその群生する荻は、山荘の軒端にまで迫ってきているのだろう。夕霧はその軒端の荻の露に濡れてしまうと訴えている。また、「荻原」の一本一本の荻の枝の葉に露が置いているとなれば、それをかき分けて帰る夕霧はさぞかしびっしょりと濡れるであろう。都の貴族の邸で趣味的に飼い慣らされた自然ではなく、容赦なく人間に迫り来る、荒々しい自然なのである。

この「荻原」という言葉は、管見によれば、『源氏物語』以前の作品としては、次に挙げる『実方集』の一例しかない。

人に物言ひはじめて、二日ばかり音もせで、かくなん

Ⓠ風吹かぬうらみやすらんうしろめたのどかに思ふ荻原の玉（たま）（『実方集』書陵部蔵（五〇一・一八三）・三）

「実方が女のもとに通い始めて、二日ばかり手紙も出さ

（七三）

ない日があってから、このような歌を贈った」という詞書がある。「風が吹かないことを（僕が訪れないことを）あなたは恨んでいるのでしょうか。とても心配だなあ。僕はあなたのことをゆったりと穏やかに愛しているのです。荻原の荻の葉に置いた玉の露のように、涙を浮かべているあなたよ」という意味であろう。「物言ひはじめて」を「通い始めて」という意味で解釈してみたが、「求愛の手紙を出し始めて」と解釈することもできるので、その場合は、「僕が手紙を出さないことをあなたは恨んでいるのでしょうか」という意味になる。「荻原」という言葉を使っているので、おそらく女の家は、荻が群生して原となっている郊外にあるのだろう。風が荻の葉に吹くことが男が女に音信や訪問をすることの喩えとなっているのは、平安和歌における常套的な表現である。しかし、荻の葉に置く露を「玉」と詠んで女の涙の喩えとしているところに新味がある。

しかし、この歌の本文は詞書からして異同が多く、次に挙げるように、書陵部蔵（一五〇・五六〇）では第五句が「荻原の玉」とはなっていない。

（七四）

久しくおとづれで、さるはむつまじくなりにけり

Ⓡ風吹かぬうらみやすらむうしろめたのどかに思ふ荻の葉の音

（『実方集』書陵部蔵（一五〇・五六〇）・一二八）

第五句は「荻の葉の音」となっていて、「荻原」の語も「玉」の語もない。第五句については諸本の本文が乱れていて、書陵部蔵（五〇一・一六九）が「おきはらさと」、書陵部蔵（五〇一・一五七）が「をぎはらのさと」となっていて、両者に「荻原」の語はあるが、「玉」ではなく「里」となっている。[注4]

というわけで、『実方集』の歌は本文が揺れていて確実性がないのであるが、Ⓠに限ってみれば、「荻原」という珍しい言葉、そして、荻の葉に置く「玉」（露）を詠んでいるという点において、夕霧の歌と共通している。しかし、歌の内容から考えると、夕霧の歌が実方の歌を引用しているとは考えにくい。[注5]

「荻原」という言葉は、和歌に限らず、散文にまで手を広げてみても、『源氏物語』以前の作品においてなかなか

用例が見つからない。「ジャパンナレッジ」の新編日本古典文学全集の全作品を対象とした語彙検索によれば、『源氏物語』以前には「荻原」の用例がない。現存しない作品に「荻原」という言葉があって、それを『源氏物語』が踏まえているのか否か、それは今となってはわからない。しかし、あまり用例のない「荻原」という言葉を『源氏物語』が積極的に使ったことは確かであろう。『源氏物語』には、この⑪とこれから述べる⑬の、合わせて二例もの用例があるからである。

⑫芹川（せりかは）の大将のとほ君の、女一の宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひわびて出でて行きたる絵（かた）をかしう描（か）きたるを、いとよく思ひ寄せらるかし。かばかり思しなびく人あらましかばと思ふ身ぞ口惜しき。

荻の葉に露吹き結ぶ秋風も夕（ゆふべ）ぞわきて身にはしみける　（蜻蛉巻二五九頁）

⑫は、薫が明石中宮腹の女一の宮に絵を献上しようとして、「芹川の大将」という物語絵を見ている場面である。明石中宮腹の女一の宮に恋い焦がれている薫が、「芹川の大将」の「とほ君」が女一の宮に恋い焦がれている秋の夕暮に思い余って出かけて行った絵を見て、自分と同じだとなぞらえてしまうだろうよと語り手は言っている。語り手はその後、薫の心中に入り込み、「とほ君」になびいている「芹川の大将」の女一の宮ぐらいに、明石中宮腹の女一の宮が自分になびいてくれたならばどんなによいかと思うにつけても、そうはいかない我が身が口惜しいと語っている。そして薫は独り、歌を詠む。「荻の葉に対して、露を吹き飛ばしたり露を結ばせたりする秋風も、夕べがとりわけ我が身にはしみるなあ」という歌である。「芹川の大将」という物語は散逸してしまったので今となってはその中身を知るべくもないが、おそらく、この「とほ君」が秋の夕暮に出かけていく場面では、秋風が吹いて荻の葉の露を飛ばしたり結ばせたりする風景描写があるのだろう。「かばかり思しなびく人」という部分に「かばかり」（この程度）という表現があることから、薫の眼前にある絵の中の荻の葉が風になびいていて、それが「芹川の大将」の女一の宮が「とほ君」になびいていることを象徴しているのだろう。風が「とほ君」、荻の葉が女一の宮、荻の葉に置く露は「とほ君」を思って泣く女一の

（七五）

宮の涙であり、風（とほ君の音信や訪問）によって荻の葉の露（女一の宮の涙）が吹き飛ばされたり（嬉しくて涙が乾いたり）、結んだり（悲しくて涙が出たり）する情景が物語に描かれているのかもしれない。あるいは、その情景を詠み込んだ和歌を「とほ君」が歌っていたのかもしれない。薫の歌が「芹川の大将」の物語の場面を引用していることに間違いはない。薫は、「とほ君」と女一の宮との相思相愛の悲恋の物語絵を見て、悲恋という意味では共感しつつも、相思相愛という意味ではそうはあり得ない我が身の辛さをかみしめながら「身にはしみける」と歌ったのであろう。

⑬　松虫の声をたづねて来つれどもまた荻原の露にまどひぬ　（手習巻三一五頁）

⑬は、浮舟目当てで小野の庵を三たび訪れた中将が、浮舟に詠みかけた歌である。「松」に「待つ」を掛け、「僕のことをあなたが待っていると思って松虫の声を訪ねて来たけれども、あなたがつれないので、また荻原の露に迷い込んでしまいました」という意味である。「松」に「待つ」を掛けた中将は、浮舟が自分のことを待っていることを期待しているので、「風を待つ荻」＝「男を待つ女」という常套的な連想が働く「荻」を歌材として選んで、おのが願望を託したのかもしれない。舞台は比叡山のふもとの小野の山里であるから、荻が群生して「荻原」となっているのだろう。「露」は眼前の荻原に置く露であると同時に、中将の涙の象徴である。

「荻原」という言葉については、先に述べたように、『源氏物語』以前にはⓆの『実方集』にしか用例を見出せない。『源氏物語』の中では、⑪の夕霧巻の夕霧の歌と、この⑬の手習巻の中将の歌との、合わせて二例がある。両者ともに小野の山里が舞台であるから荒々しい自然の「荻原」が詠まれているのであろうが、両者ともに歌ことば「荻」の定番である「音」ではなくて「露」を詠み、その「露」が女につれなくされている男の涙の象徴であるところに共通性がある。

読者の〈読み〉を積極的に展開するならば、夕霧の歌と中将の歌とは、特殊な言葉「荻原」によって緊密に連繋していて、『源氏物語』の既に書かれた部分を『源氏物語』自らが引用する、『源氏物語』による源氏物語取りと

読むことができるかもしれない。そもそも、浮舟の住む小野の山里は「かの夕霧の御息所のおはせし山里よりはいますこし入りて」（手習巻三〇一頁）と語られているので、手習巻の小野の物語は夕霧巻の小野の物語を読者に想起させる素地を充分に持っている。中将の歌を読んだ読者は夕霧の歌を思い起こし、ひいては、嫌がる落葉の宮を夕霧が強引に我が物としてしまった物語を想像し、浮舟の身にもその危機が迫っていることを予感する。落葉の宮が夕霧の物となったように、浮舟も中将の物になってしまうのか、あるいは後に浮舟への接近を画策する薫の物になってしまうのか、読者は手習の物語の背後に夕霧の物語を透かし見ながら、物語を読み進めていくのである。途切れたように終わる夢浮橋巻は結末を提示しないが、その先の物語展開のうちの一つとして、夕霧の物語のように男が女を強引に我が物としてしまう物語展開が提示されるのである。

⑭荻の葉に劣らぬほどほどにおとづれわたる、いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけりと見知りにしをりをりも、やうやう思ひ出づるままに、「なほかかる筋のこと、人にも思ひ放たすべきさまにとくなしたまひてよ」とて、経習ひて読みたまふ心の中にも念じたまへり。

（手習巻三二二～三二三頁）

⑭の傍線部は、中将の度々の訪問や手紙をやっかいに思っている浮舟の心内語である。「荻の葉の音に劣らない程度にしばしば音連れ（音信や訪問）をしてくるのは、とても煩わしいなあ」と浮舟は思っていて、荻の葉の「音」から「おとらぬ」の「おと」を導き出し、「おとづれ」に荻の葉の「音擦れ」と音信や訪問の意味の「音連れ」を掛けているところが、和歌的な発想に裏付けられた表現となっている。和歌の連想の体系をふんだんに散文に取り入れた歌ことば表現である。

しかし、この心内語の直後、浮舟は、人の心は強引なものだとわかった過去の体験を思い出すにつけても、男が自分への求愛を諦めるよう、早く尼姿にしてほしいと願う気持ちを抱いていることが語られる。「荻に吹く風＝女を訪れる男」という和歌的な、つまり男女の典型的な有り様からの脱出を浮舟は願っているのである。『源氏物

（七七）

語』五十四帖が手習巻という最終局面に来て、それまで物語が依拠してきた和歌的な男女の類型を否定し、そこからの脱出を願う浮舟を描くことの意味は重い。(注6)

最後に、⑫の蜻蛉巻の「荻」の季節と、⑬⑭の手習巻の「荻」の季節とが同じ時期であることにも注目したい。蜻蛉巻は、失踪した浮舟を死んだものと思い込んで悲しむ人々の物語を語る巻で、続く手習巻は、実は浮舟は生きていて横川の僧都に助けられて小野の庵に住んでいることが明かされる巻であり、両巻は時間の系列からすると同時期の物語を語っている。しかし、読者は二つの巻を同時に読むことはできないので、通常は蜻蛉巻、手習巻の順に読んでいく。そうなると、それぞれの巻のどの部分がどの時期に重なるのかが読者にとっては曖昧になってくる。しかし、蜻蛉巻の⑫に「荻」、手習巻の⑬⑭に「荻」が出てくることによって、両者が同じ秋という季節であり、両場面が同時期における都と小野の物語であることを読者に喚起する仕掛けになっているのである。都で薫が女一の宮への思慕の情をかみしめている時に、小野では中将が浮舟をせっせと口説こうとする一方、浮舟は男から逃れるために出家したいと願っている、その三者三様の思いが、「荻」という景物によって同時期のこととして結び付けられて、読者の前に提示されるのである。

以上、夕霧巻以降の物語における「荻」の用例を見てきた。常套的な「音」ではなく「露」が取り上げられるようになること、「荻原」という特殊な言葉が使われること、散逸物語「芹川の大将」の一場面と関わりがあること、蜻蛉巻と手習巻の場面が「荻」という景物によって同時期であることを印象付ける仕掛けになっていることなどを論じた。惜しむらくは「芹川の大将」という物語が散逸してしまったことであり、その中身が不明であるゆえ、依然として問題は残る。引き続き、研究を続けていきたい。

おわりに

『源氏物語』における歌ことば表現としての「荻」の諸相を探ってみた。『源氏物語』全体を俯瞰してみると、平

安和歌の連想の体系を踏まえた歌ことば表現「荻」は、『源氏物語』の中でも、次第に後半にいくにつれて、常套的な使い方には収まらずに、より複雑化した独自の路線を歩んでいったと言えようか。

注

（1）この中務の歌は『和漢朗詠集』にも入っていて、新潮日本古典集成『和漢朗詠集』や新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』は、「荻」に「招き」（まねくの意）を掛けると説き、「私が荻の葉ならば、私の招きに応じて秋風（あなた）も訪れるでしょうに」の意味と解釈している。しかし、「荻」に「招き」を掛けるという見解はいかがであろうか。確かに、「秋の野の草のたもとか花すすき穂に出でて招く袖と見ゆらむ」（『古今集』秋上・二四三・在原棟梁）のように、「すすき」の穂が「人を招いている」と見立てるのは和歌の常識であり、「荻」の穂は「すすき」の穂と形状が似ていることから、「荻」の穂も「すすき」と同様に「人を招いている」と見立てられる可能性は充分ある。実際、平安中期の歌人である小大君の歌「白妙の袖とや見えん秋深み霜枯れにたる荻の招かば」（『小大君集』一六一）は、荻の穂が人を招くと見立てた歌である。しかし、この小大君の歌のような例は稀であり、管見によれば、平安中期までの和歌において、荻の穂が人を招くと見立てた歌はほかにない。竹鼻績『小大君集注釈』（私家集注釈叢刊1、貴重本刊行会、一九八九年）の当該歌の解説（二三〇頁）でも、荻の穂が人を招くと見立てた歌はこの歌以外にはないようであると言っている。また、平安時代に「招く」の語があったのかどうか、疑問が残る。『日本国語大辞典　第二版』（小学館、二〇〇〇年）によれば、「招く」は他動詞カ行四段活用動詞で「まねきよせる。よびよせる」の意味があり、『古事記』『催馬楽』『万葉集』の用例が挙げられている。宮島達夫編『古典対照語い表』（笠間書院、一九七一年）によれば、『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』『古今集』『土佐日記』『後撰集』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『方丈記』『徒然草』の中で、「招く」の用例は『万葉集』の二例だけである。『源氏物語大辞典』（角川学芸出版、二〇一一年）にも「招く」の項目はない。「招く」は上代にあった語ではあるが、平安時代の作品では見かけない語なのである。やはり、「荻」に「招き」の意味を掛けるかどうかについては、慎重でありたい。

（2）あるいは、「もっともだなあ、あの人が僕を恨むのも。秋風が荻の葉に吹いて「そうよそうよ」と相づちを打ちなが

（七九）

ら「そよそよ」と立てる音にはっと気付かされるよ、あの人のところへ行かないでいるうちにもう秋になってしまったことを」という解釈もできるかもしれない。

(3) ここで義孝の歌を踏まえるか否かについては、現代の注釈書では意見が分かれている。義孝の歌を挙げているものは新潮日本古典集成、新日本古典文学大系、挙げていないものが日本古典全書、日本古典文学大系、玉上琢彌『源氏物語評釈』、日本古典文学全集、新編日本古典文学全集である。

(4) 書陵部蔵『実方集』(五〇一・一六九)と(五〇一・一五七)の本文については、竹鼻績『実方集注釈』(私家集注釈叢刊5、貴重本刊行会、一九九三年)に拠る。

(5) 深読みをするならば、Qの歌は、今後の物語展開の先取りと考えられるかもしれない。この後、夕霧が落葉の宮に接近した一夜を結婚の初夜と見なす一条御息所が、二日目に夕霧の訪問も手紙もないことで傷つき、そのことに気付いた夕霧があわてる物語が展開していく。実方の歌を夕霧の気持ちに即して解釈するならば、「僕が訪問しないことを一条御息所は恨んでいるのでしょうか。とても心配だなあ。僕は落葉の宮のことをゆったりと穏やかに愛しているのです。荻原の荻の葉に置いた玉の露のように、涙を浮かべている一条御息所よ」とでもなろうか。悠長に構えている男が、訪問されない女の側の涙を気がかりに思いやるという実方の歌は、夕霧の気持ちを象っていると言えるかもしれない。

(6) 和歌的な男女の類型を否定する浮舟の先駆として、独特な結婚拒否観念を極めていく大君がいる。大君が伝統的な歌ことばから次第に離れていく有り様(よう)については、拙稿「大君　歌ことばとのわかれ」(『源氏物語　宇治の言の葉』森話社、二〇一一年)を参照されたい。

※『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集に拠り、(　)内に巻名、頁数を示す。和歌については、特に注記がない限り、『新編国歌大観』(角川書店)に拠り、新編国歌大観番号を付す。『万葉集』の本文は新編日本古典文学全集に拠り、旧国歌大観番号を付す。ただし、いずれも、私に表記を改めた所がある。